

おわりに

多摩地区の公立図書館は、永い間我が国の公共図書館活動を牽引する先進的な活動を続けてきました。とくに1970年代から1980年代においては都下の自治体には市民の支持を受け、高いサービス実績を記録する図書館が綺羅星のごとく存在していました。これらの図書館には個性的な名物図書館長のもとに意欲的な司書集団が形成され、お互い競い合ながら市民サービスの向上や図書館の在り方の改善に取り組んでいました。

多摩市においても当時の伊藤峻館長のもと「イトーイズム」といえるような、先進的な取り組みを行っていました。たとえば図書館未設置の町が少なくない時代に複数の図書館を設置し、市役所より早く電算の導入を図ったり、また独特の分類法を編み出し、柔軟な資料の管理を行ったり、さらにそれまで図書館において収集されなかった資料を集めたり、職員研修に工夫を凝らすなど、常に図書館改革に取り組んでいました。

これらの取り組みの結果、多摩市における市民の図書館利用は常に全国のトップレベルを維持してきました。

もちろん行政サービスが向上するには担当課の努力だけでは困難です。多摩市においては図書館現場の意欲的な取り組みとそれを支える首長部局との連携、そしてなによりも歴代の市長の政策が功を奏したと思われまふ。一般的な国民が図書館に対してイメージする「娯楽」「教養」のための本を借りる、という点については、図書館先進地域である欧米諸国なみとはいえないまでも、市民がほぼ満足するレベルにあるといえるでしょう。

一方、図書館から本を借りていない市民が約80%、本を借りずに図書館を利用している市民を加えても図書館を使わない市民が60%以上は存在すると思われまふ。図書館を使わない理由の多くは「暇がない」ことだといわれています。つまり働き盛りの市民の利用が少ないといえます。しかし世界の未曾有の変化に直面し、不況、介護、子育て、地域問題など未経験の課題に「自己判断自己責任」を迫られている「暇のない」市民にこそ、解決のための知恵が必要とされています。

さいわい多摩市の図書館には高度な情報提供サービスを可能とする専門職集団が存続していますし、市民の身近に複数の図書館が配置されています。いわば名医のいる街角の医院が多数存在しているようなものです。さらに名医をバックアップする大学病院があれば医療態勢は完璧となります。当委員会に付託された役割は、いわば街角の医院とそれをバックアップする大学病院の関係のような、分館、地域図書館と中央図書館のあり方を検討することであったと思います。当基本構想の目的は、新しい中央図書館が従来型のサービスをさらに充実させるとともに高度な情報提供や市民の多様な活動や交流を可能とする空間を提供し、分館、地区図書館をバックアップすることで多摩市の市民の生活を安全、豊かにし、自己実現を後押しすることにあります。

当基本構想において示された方向性は、我が国の図書館では未だ充分には実現されていないものです。実現すれば、公共図書館の「多摩モデル」と呼ばれるものを創る試みであるといえるでしょう。当基本構想が、これから策定される諸計画作成の際に大きな方向性を示すことができると信じております。

会議開催時に市長には複数回お運びいただきました。教育長にも毎回のようにお出でいただきました。通常あり得ないことであり当会議の重要性を改めて認識いたしました。

自治体において開催される各種の審議会では、いわゆる当て職の委員が多く本音の討議が行われないことが少なくないのですが、当委員会では委員長はじめ委員のみなさんの多摩市に対する愛情にあふれた本音の討議が毎回展開されました。

しかしそのために委員長はじめ多くの委員からの提案で会議の回数が大幅に増加し、しかも会議が休日の夜半まで及ぶこともあり、事務局等の関係者には大変なご苦労をお掛けしました。委員会を代表して関係者のみなさまに心から御礼を申し上げます。

多摩市立図書館本館再構築基本構想策定委員会委員
常世田 良

あきる野市中央公民館主催・市民企画講座 図書館はともだちの会（企画・運営）

新しい中央図書館づくりへの思い —多摩市に中央図書館をつくる会の取り組みから—

青木洋子（多摩市に中央図書館をつくる会）

1. 図書館との関わり—自己紹介を兼ねて

- ・1976年多摩市民に、永山地区で子育てを始める。
- ・関戸子ども分館で図書館主催絵本作家の講座に参加→図書館が絵本の大切さを学ばせてくれた。
- ・1984年鶴牧地区でコアラ文庫を始める。当時の伊藤峻館長が文庫活動の協力説明に来てくれた。
- ・数年たって多摩市文庫連絡協議会(文庫連)の団体会員になる。
なかよし文庫の住田啓子さん、廣井ひよりさんたちが、活動の中に憲法の学びや図書館の学習、見学など、主権者として社会や政治についても学ぶことを実践。
それは市民協働の実践者としてよりよい関係を築くために。
1993年日野市を参考に、「学校図書館に学校司書を置いてください」という請願運動が採択
⇒資料：第1回図書館学習会の記録「多摩市の図書館を求めて」伊藤峻氏 1999年8月9日

2. 多摩市に中央図書館をつくる会の活動

- ・1999年多摩市が第4次総合計画策定のために市民の「まちづくり研究会」というワークショップを開催、市民提案を市長に提出。その後2000年に中央図書館の早期実現を目指して会を立ち上げた。⇒資料：リーフレット「多摩市に中央図書館をつくる会」の紹介
- ・学習会、見学会を何度も実施、議会に請願活動し、行政に働きかけをしてきた。
いろいろな経過があって、2016年に基本構想を策定することになった。2018年に基本計画策定し、その後設計者選択後、2019年に基本設計が完了し、2020年5月に実施設計が終了。2022年秋に開館予定。⇒資料：多摩市の中央図書館施設設計画の経過
- ・2010年唐木田図書館開館(2011年3月)に向けて委託反対の陳情をする(不採択)。
2014年度再度委託を廃止する政策提案を提出した(趣旨採択)。
⇒資料：図書館研究8号(2016年10月2日講演録)

3. どのような中央図書館ができるのか

- ・多摩市人口148,000人、図書館7館(本館、駅前拠点館2館、地域館4館、市役所内行政資料室)
- ・「基本構想・基本計画」ではどのような議論があったのか?
「知の地域創造」柳田邦男氏(基本構想検討委員会委員長)⇒資料：基本構想「はじめに」「序章」
多摩市は全国的に見て利用率が高い。そこに整備する中央図書館は今までなかったものを。
AI時代がすぐ目の前、自動貸出機だけでなく、棚への配架もロボットが。そこで人がすることは? 常世田良氏(基本計画策定委員会委員長)⇒基本構想「おわりに」
中央図書館を核とした図書館網を考える。地域図書館の役割と支える中央図書館。
地域資料充実で行政・議員にも役立つ図書館。
基本構想・基本計画の支援コンサルタントは寺田芳朗さん「(株)寺田・大塚・小林計画同人」

委員として新中央図書館に何を実現したいかを伝えるために、私たちが考えたこと、したこと。

- ・図書館は何のためにあるかを再確認。学びの中から考える。
⇒資料：中央図書館がなぜ必要なのかを考えるための資料一覧・基本構想に生かしたい参考資料(2016年8月2日作成) “私たちの図書館宣言”
- ・真の行革は直営でなければできない。→岡山市、調布市、浦安市の図書館活動から学ぶ
- ・図書館は資料、建物、人の3要素のうち人が一番大事。専門職集団の確立を目指すべき。
- ・今度こそ市民と創り上げる図書館を。唐木田図書館整備の反省から。
- ・市民企画講座で連続学習会の開催。

図書館の基本を押さえた上で、新しい図書館のカタチを目指す。
場所・外観：多摩中央公園の北西角地、コンセプト「公園とレンガ坂の調和」、傾斜地の特性を活かして地上2階、地下2階の4層。3ヶ所の入口
建物機能：消費エネルギーを50%以上削減する「ZEB Ready (ゼブレディ)」認証取得、防災機能、バリアフリー、ステッププラザ(大階段)、エスカレーター
2階：広場系開架 節度あるにぎやかなフロア、4段・3段が中心の書架
メインカウンターと別のサテライトカウンター「知のひろば」
子どもや親子が利用しやすいフロア、「へなそうるのへや」、グループ学習する学生などラーニングコモンズ、市民活動室、カフェなど、座席(約320席)
1階：静寂系開架 調べものに適した幅広い分野の資料、5段、6段、7段書架「知の階層構造」
読書席(約140席)、静寂読書室、個人研究室、対面朗読室、録音室
地下1階、2階：事務エリア、書庫(35.2万冊)、配本ヤード(3.5万冊)

4. あきる野市の方々と共に考える図書館像

一人一人にとって図書館って何ですか？

すぐれた図書館長は種をまく人

お勧めの本

『移動図書館ひまわり号』前川恒雄著 夏葉社 1988年の筑摩書房刊の復刊

『生きるための図書館—一人ひとりのために』竹内愨著 岩波新書

コロナ禍で休館になったときに出会った本

『夢みる帝国図書館』中島京子 「本が我らを自由にする」

『戦場の秘密図書館—シリアに残された希望』マイク・トムソン／著 小国綾子／編訳

『希望の図書館』リサ・クライン・ランサム／作 松浦直美／訳

終わりに

図書館の発展が平和な社会をつくることを信じて、子ども達の未来が豊かなものになるよう皆さんの力を合わせて活動を続けましょう。

事前のご質問

◎なぜ図書館にここまでエネルギーを注ぐことができたのか？

◎多摩市ってすごいねだけでなく、何度も陳情されているご苦勞を伺いたいです。

◎社会が多様化するなかで、こうした市民活動を次の世代に引き継いでいくために何か工夫しているのか。ぜひ教えていただきたい。

(2) 多摩センターという「知の地域創造」の舞台

昭和46年に多摩ニュータウン一次入居が開始され、京王線、小田急線、多摩都市モノレールが開通。複合した都市機能を有する商業・業務の多摩ニュータウンにおける中心地として、「多摩センター」と名付けられました。

そして、視点をずらすと「多摩センター」は、パルテノン多摩に縁取られた多摩中央公園ができたことで、公園を中心とした生活・文化・芸術の拠点としても生まれ変わり、今日に至っています。

わが国の高度成長期を乗り越えてきた多摩ニュータウンは今、少子化、高齢化の波の中で、経済面でも生活環境の面でも再生に取り組みなければならない時期を迎えています。そのような時代の転換点の中で、多摩市の文化・芸術の中心となってきた多摩センターも、旧来の図書館の枠を超えた「知の資源を集積したセンター」としての新たな図書館を中核に据えることで、「知の地域創造」の拠点として変貌させるならば、「のびやかに生きられるまち」「誇れる故郷のまち」のシンボルとさえなります。冒頭に掲げた将来像は、今すぐには、すべてを一挙に実現できなくても、新たなニーズに支えられて、行政と市民が二人三脚ですすめることで、今と将来の多摩市民の「知の資源」が耕されて、他には類を見ない心の豊かなまちづくりの道しるべとなるでしょう。

(3) 「知の地域創造」のビジョンに一步近付くために

この策定委員会では、単に中央図書館の機能を検討するのではなく、図書館ネットワーク全体をまず考えることとし、検討を進めました。

その過程では、ヒアリングによる、市民や図書館員、行政などの様々な意見があり、これまでのアンケートの結果があり、各委員からの提言や議論がありました。そして、「若者」「子どもの空間」「子どもの心の発達」「ベビーカー」「絵本」「障がい者とバリアフリー」「お年寄りの心の拠り所」「コミック・アニメなどの新しい表現ジャンル」「インターネット」「公園との一体化」「文化財」「古民家を活かす」「新しい図書館像」などのことばが次々出され、新しい中央図書館のイメージが膨らんでいきました。

その中で、今の図書館ができないことや、図書館の外(そと)にあるものと「連携」するのではなく、さらに視座を1段高くしてそれらを包含して考えること、これまでの図書館のイメージからはみ出した、公園やパルテノン多摩、近隣の大学に囲まれた環境や、アニメやインターネットも含めたメディア、これまでに利用していない市民への配慮などへと広げたいと、知の地域創造センターとして、さらに「のびしろ」を広くとって考えるべきだとの提言がありました。

「『知の地域創造』センター」。それは今の段階では必ずしも全体像を漏れなく描くことは困難ですが、大切なことは、可能な限り希望に満ちたビジョンを描き出すことでしょう。もちろん、10年後、20年後、30年後には、子どもたちや若者のニーズのシャワーを浴びて、今は想像できないような形に変容していくことと思います。

今この基本構想でイメージを描けるのは、そのセンターの核となる、中央図書館のビジョンです。この基本構想では、将来を希望をこめて大胆に構想しつつ、第一章からの四つの章で、多摩市の図書館ネットワーク全体から、中央図書館の機能へ、そして今後の基本計画という現実の施策へと、フォーカスを絞っていくこととします。

序章 「知の地域創造」のために

(1) 「知の地域創造」センターの構想

多摩中央公園に生まれた「知の地域創造」センターでは、晴れた日にはテーブルと椅子があちこちに置かれ、木陰でカフェを楽しみながら本を読んだり、おしゃべりを楽しんでいます。公園の大池に面した「大芝生広場」では、家族連れがまだ暗い時間からテントを張り、周りの樹の根元に懐中電灯を手にして、セミの羽化を観察しています。観察が終わると創造センターの机で、自由研究のまとめです。

朝の時間帯は、2階でお年寄りが新聞を読む静かなスペースから、公園の向こう側にパルテノン多摩の円柱が望めます。パルテノン多摩の公園側にも、図書館員が選んだ本が配置され、定期的に入れ替えがされています。そこから創造センターまでの道すがら、ところどころで文化財や本の展示が楽しめます。



創造センターの公園側は、公園に溶け込んだデザインで、人々が自由に出入りしています。入り口から入ると、広いギャラリースペースには、古民家と呼ぶように縄文土器に活けられた花などの文化財展示や、市民の写真作品が並んでいて、市民のひろばになっています。

このギャラリーは、週に1度は、若者向けのライブスペースに早変わり。パルテノン多摩のサブステージとして親しまれ、デジタルサイネージの画面には、パルテノン多摩のイベントが映し出されています。

午前中からベビーカーを押す親子連れが、にぎやかな1階のフロアに集まり始めました。これからどこにでかけ、どこでランチにするか、本やインターネットで調べています。

午後になると、保育園児がおはなし室にやってきて、本のよみかせをしてもらっています。障がいのある子どもも、マルチメディアの絵本や布の絵本を大きな声を出して楽しみ、集中しています。

夕方、取引先を回ったビジネスマンがパソコンを使って判例関係のデータベースで調べ物をしています。

学校帰りの学生も、みんなで話し合っただけをしていますが、今は気分転換に、マルチメディアアブスで多摩市を舞台にしたアニメを楽しんでいます。

あたりが暗くなると、ぼんぼりのように、創造センターが遠くからでも浮かび上がり、そこに行けばだれでも受け入れ、何か見つかるような気がします。

この創造センターに集まる人々は、様々な活動を目にして、本やインターネットで調べ、仲間になったり、教えたり、触発されることで、グループでも、あるいはひとりひとり個室に閉じこもったままでも「知の地域創造」の一員になっています。

この公園を囲む一帯には、心を豊かにしてくれる仕掛けがあふれています。

ひとつひとつのサービスは、海外の図書館や日本の先進的な図書館では、既実現しているものが少なくないでしょう。でも、多摩中央公園のような広い緑と開かれた青い空の下にそれらを集中させ、様々な文化や芸術を楽しめる「知の地域創造」センターは、他にあるでしょうか。

デジタルサイネージ(電子看板) : は、プロジェクターやモニターに動画や映像や情報を映し出す装置、表現媒体のこと。

<多摩市の中央図書館施設計画の経過>

1981年「第二次総合計画」の中央図書館と7地域館の8館構想に基づき、1990年中央図書館基礎調査報告が行われ、1991年「第三次総合計画」の後期計画で建設予定となっていた。1998年には図書館協議会で中央図書館についての答申が出される。

2001年 第四次総合計画で財政難を理由に「建設」→学校跡地利用による「中央図書館機能の整備」

2004年 3月市議会で「中央図書館の早期整備を要望する請願」採択

2006年 第四次総合計画後期5年基本計画「戦略プラン」が策定され、市民を交えて構想案づくりを行うことになった。2007年9月8、9日にTAMAMIRAI2007市民まちづくり討議会が開催され、「市民が求める多摩市の図書館・図書館サービス」をテーマに討議した。

2008年 3月に本館が西落合中学校跡地に暫定10年の予定で移転。

2010年 2008年5月に図書館協議会に諮問された「多摩市における中央図書館機能およびその整備のあり方について」が4月に答申された。

2013年 10月に「公共施設の見直し方針と行動プログラム」が策定された。分散型(7館)から集約型(3館)への大きな方向転換が示され、本館(中央図書館)再整備の提案が出た。

2016年 「多摩市読書活動振興計画」を策定。7月「行動プログラム」の更新案が示される。地域館4館の住民から出された陳情・要望書が功を奏し、廃館は見直しとなった。6月から「多摩市立図書館本館再構築基本構想策定委員会」開始。

2017年 3月に「多摩市立図書館本館再構築基本構想」が策定されたが、「基本計画」策定予算が承認されなかった。4月以降図書館本館整備用地について議会の「パルテノン多摩・周辺施設整備等特別委員会」で検討を重ね、12月に「基本計画策定委員会」関連費用の補正予算が承認された。

2018年 1月25日の議会特別委員会で、本館再整備の候補地が中央公園北西角地レンガ坂横に確定した。2月18日～8月4日「基本計画検討委員会」が行われ、8月27日「多摩市立図書館本館再整備基本計画」が策定された。10月から公募型プロポーザル方式で設計業者の選考が始まり、第1次選考で5社が選ばれた。

2019年 1月に第2次選考があり「佐藤総合計画」が選定された。2月から「基本設計」策定開始、ワークショップ3回、市民説明会3回が行われ、8月9日「基本設計概要書」が公開された。

請願運動を始めて19年、2022年秋開館に向けてようやく中央図書館のカタチが提案された。

2020年 3月に実施設計の策定予定が、敷地の高度計画の高さ制限の解釈の違いにより一部設計変更となり、5月に完了した。その後建設工事に入るために入札事業が行われている。

<近年の主な活動>

<2015年>

2013年に策定された「公共施設の見直し方針と行動プログラム」の具体的計画を注視するため、

図書館協議会・議会の傍聴、市民懇談会出席、教育長・市長との面談などを行う。

多摩市立図書館本館再構築基本構想
はじめに

- 1月29日 武蔵野市立図書館見学（武蔵野プレイス、中央図書館ほか）
- 4月15日 市議会議員立候補予定者へのアンケート特集号発行（ニュース NO.57）
- 8月23日 学習会&ワークショップ

『中央図書館と地域館の望ましいあり方～図書館の全域サービスを考える～』

第1部学習会「中央図書館と地域館の望ましいあり方」～図書館の全域サービスを考える～ 講師：調布市立図書館長小池信彦氏

第2部ワークショップ「次世代のための図書館網を考えよう」

- 11月11日 調布市立図書館見学 中央図書館と分館2館（佐須分館、調和分館）

<2016年>

「行動プログラム」の更新と「本館再構築基本構想」を注視するため、図書館協議会・議会・基本構想策定委員会の傍聴、市長との面談などを行う。

- 6月25日～「多摩市立図書館本館再構築基本構想策定委員会」全7回 最終日 2017年1月7日。コンサルタントを「寺田・小林・大塚計画同人」に委託。代表が委員となる

7月3日 『多摩市の次世代のための図書館網を考えるワークショップ パート2』

7月7日 浦安市立図書館見学 中央図書館、分館3館、サービスポイント2カ所。

7月21日 コンサルタントのヒアリングを受ける。

- 11月6日 公民館市民企画講座として連続講座『中央図書館は未来をつくる』4回シリーズ開催。

第1回「いいまちづくり、役立つ図書館を目指して—図書館の担い手を考える—」

講師：森下芳則氏

- 12月4日 第2回「図書館のめざすもの—変わりつつある図書館を考える」

講師：山口源治郎氏

- 1月15日 第3回「図書館が日本を救う—図書館の可能性—」講師：常世田良氏

- 1月24日 第4回 調布市立中央図書館見学

<2017年>

「基本計画」策定の準備として市民企画の連続講座を実施し、本館整備用地が検討される「議会特別委員会」を注視しながら、図書館協議会・議会の傍聴、教育長との面談などを行う。

- 6月29日 図書館見学：大和市立図書館（大和市シリウス内）

7月2日 公民館市民企画講座として連続講座『中央図書館は未来を開く—中央図書館を実現する上で大切なこと』3回シリーズ開催。

第1回「市民の図書館」をめざす図書館の担い手を考える—公務としての図書館員の仕事— 講師：大澤正雄氏

7月30日 第2回「社会的共通課題」サービスの本格的な展開を—中央図書館の資料・情報提供サービスを考える 講師：戸室幸治氏

- 8月27日 第3回 連続講座を通して、多摩市の図書館網を考えるワークショップ—基本計画策定に向けて ファシリテーター：向山聡氏

以上のようなまちづくりを目指すことを、当委員会では、「知の地域づくり」あるいは「知の地域創造」というキーワードで表現することにしました。ここで言う知とは、知識のことだけではない。情報、知識、知恵、知性のすべての意味を含めています。

新たに建設する中央図書館は、そのような意味をこめた「知の地域づくり」の様々な事業を展開していくためのセンター（中心拠点）機能を果たしていく施設にしようというのです。たとえば、がん制圧月間という、保健所や市の保健部門の業務と考えられがちですが、図書館ががん啓発の解説展示や書物展示などをして市民の健康増進の役割を果たすとか、著名な作家が没した時には特別展やシンポジウムなど文学館的な役割を担うとか、市内の若者のミュージックグループとの協働でロックの歴史と広がり展示とライブ演奏会を開くとか、高齢者の心を豊かにする絵本の連続講座を開くとか、乳幼児精神保健の専門家の協力を求めて出産前の若い母親たちに胎児に絵本を読み聞かせをするマタニティブックスタートの実践講座を企画する等々、“撃って出る図書館”の役割を担うようになれば、まさに地域住民と図書館とが一体感を強めることになると思うのです。

特に、新しい中央図書館の開かれた役割という点で重要であり、「知の地域づくり」のセンター的機能のイメージ形成に重要なのは、中央公園との一体化によって、遊歩道沿いに文化的展示を設けて、散策しながら文化的教養を吸収できるようにするとか、公園で遊んだ親子が気軽に立ち寄って読み聞かせをすることができる小規模な児童書の館を設置するとか、図書館の周辺に緑陰読書を楽しめるカフェやベンチを配置するなどの取り組みです。この風景は、多摩市を「文化の香りのあるまち」「子どもも老人も心豊かに生きられるまち」として、市民の記憶に刻まれるでしょうし、全国から注目されるようになるでしょう。

この基本構想の提言は、以上のような熱い思いをこめて、全7回、毎回3時間以上の時間を費やして、全委員によるひたむきな議論を経てまとめられたものです。今後は、この提言をベースにして、いよいよ行政レベルでの建設計画の策定がなされることとなりますが、その建設計画の中でこの基本構想が描き出した20年、30年後を見据えたビジョンが十分に生かされ、全国のどこにもない先駆的な図書文化センターが生まれることを切望します。

多摩市立図書館本館再構築基本構想策定委員会

委員長 柳田 邦男

はじめに

時代の変化というものは、予測するのが難しい。たとえば、1970年代前半における米国のドルの凋落や石油危機、1990年代初頭のソ連の崩壊と東欧の解体、日本におけるバブル経済の崩壊と長期不況の到来など、時代を画する変動は、いずれもほんの2～3年前までは、いわゆる有識者とされる専門家の中でさえも予測していた人はほとんどいませんでした。

ただ、現在日本で深刻化しつつある高齢化の急速な進行、核家族化と少子化の固定化、都市と地方の経済の格差の拡大については、かなり前から予測されていました。特に高齢化社会の到来については、20年以上も前から議論されてきた問題なのですが、高度経済成長の中心的担い手となってきた団塊の世代が、現実に高齢者層に入り始めた今になってみると、高齢化の波は予測をはるかに超えた重大な問題を社会的にも個別の家庭においてももたらすものであることが、ようやく痛切にわかってきました。時代の変化というものは、非情なまでに厳しいものです。

多摩市がこれから建設しようとしている中央図書館をどのようなものにするかを考えるにあたって、現在の市民のニーズに応えようとするだけでは、10年も経たないうちに、市民から古びた図書館と見られるようになりかねません。20年後、30年後に多摩地区を真に住みやすいまち、老いも若きも知的にも感覚的にも楽しく納得感・充実感のあるまち、ふるさととして永住したいと思えるまちにするには、どうすればよいかという発想をベースにして、その大きな枠組みの中で、地域の知の拠点、文化の拠点である図書館はどうあるべきかというビジョンを描き出す必要があると思うのです。

国は衰退する地方を再生させる方策として、地方創生というキーワードを使って、各地から出される施策のアイデアに財政支援をする取り組みをしていますが、提案される施策のほとんどは、地方の経済振興を目的にしたものです。しかし、世界の政治・経済の趨勢を見ても、成長する業種の偏りを見ても、日本の経済が高度成長期のような形で全国的な規模で所得水準を拡大するのを期待することには無理があるでしょう。

そこで考えるべきは、人間が日常の暮らしの中で、たのしさを喜びや幸せ感を感じるの、という時なのかという、生きることの原点に立ち戻ってみることでしょう。もちろん経済は重要ですが、それだけにすぎるのでなく、たとえ経済的にきつなくても、人々が「きょうは楽しかった」「心が癒された」「生きる力を得た」と言えるような、人と人とのつながり、支え合い、心に響く催し、知的な刺激を受ける文化的施設などが根づいた地域社会を築くなら、そういう地域こそ人間性の豊かなまちとすることができるでしょう。

さらに、安心して子を産み育てられる、病気でも障害があっても安心して生きられる、年老いても安心して生きられる、子どもも大人もいじめや差別を排除する心を浸透させている、といった社会であれば、誰もがそのまちに住み続けるに違いないでしょう。

9月29日 図書館見学：荒川区立「ゆいの森あらかわ」と「北区立中央図書館」

<2018年>

「本館再整備基本計画検討委員会」に代表が委員として参画。他の会員はできるだけ傍聴した。並行して図書館協議会・議会の傍聴、教育長との面談などを行う。

2月18日～8月4日 7回の基本計画検討委員会と見学会1回に出席

5月24日 図書館見学：川崎市中原図書館

10月4日 図書館見学：塩尻市市民交流センター（えんぱーく）内図書館本館

<2019年>

基本設計策定のために「ワークショップ」や「市民説明会」が行われたので、積極的に参加して意見を述べた。教育長との面談時には中央図書館整備に向けて、委託されている唐木田図書館の運営を直営に戻すよう働きかけた。

4月～6月 基本設計ワークショップ3回に参加

6月13日 映画鑑賞「ニューヨーク公共図書館～エクス・リブリス」岩波ホール

6月19日 図書館見学：日野市市政図書室

7月4日、8日、13日 基本設計市民説明会に参加

7月31日 基本設計案に対して要望書提出

<2020年>

6月21日 第20回総会開催

<中央図書館がなぜ必要かを考えるための資料一覧>

多摩市に中央図書館をつくる会発行資料

○第1回図書館学習会記録冊子

「市民のための中央図書館をつくろう—文化と学びの水源涵養林を—」※
講師：伊藤峻氏（初代館長）2000年3月26日 2000年7月発行

○図書館を知る連続講座 記録冊子

第1回「なぜ中央図書館が必要なのか—公共図書館の可能性—」※
講師：常世田良氏 2000年6月25日 2001年7月発行

第2回「生涯学習・学校図書館・図書館づくり—図書館の三題ばなし—」※
講師：塩見昇氏 2000年7月15日 2001年7月発行

第3回「公共図書館と学校図書館の連携—市川市中央図書館をつくる中で—」※
講師：小川峻氏 2000年9月10日 2003年3月発行

第4回「図書館の歴史—歴史から学ぶ、市民がつくる図書館—」※
講師：山口源治郎氏 2000年10月15日 2002年11月発行

○これからの図書館を考える連続講座 記録冊子

第1回「図書館利用の障害とは—障がい者・高齢者等へのサービス—」
講師：中山玲子氏 2001年9月29日 2002年9月発行

○『公共図書館は今—先進図書館を見る—』2002年6月発行。A4判130ページ

北海道・苫小牧市立中央図書館から沖縄県・石垣市立図書館まで、全国の公共図書館28館と多摩市立図書館の紹介。1館に4ページをあてて施設の概要、建設までの経緯、運営の実態、特色を分析、写真・平面図を添えた。一口に公共図書館と言っても様々で、地域に根ざした特色を持っている。運営にも工夫が重ねられ、貸し出し中心から生涯学習の拠点施設への脱皮も見てとれる。

○「市民が提案する中央図書館像（試案）」（2003年9月14日発行）

○フォーラム2003「市民が提案する中央図書館像」2003年9月14日

第1部 市民が構想する中央図書館の提案 プレゼンPP資料
内容：「市民が提案する中央図書館像（試案）」の概要
作成者：小荒井順（副代表）

○TAMA MIRAI 2007 多摩市民まちづくり討議会 2007年9月9日 9:15～9:35

情報提供「なぜ、多摩市に中央図書館が必要なのか」プレゼンPP資料
情報提供者・作成者：調査研究プロジェクト 小荒井順

○第29回図書館学習会&ワークショップの報告書（概要版） 2015年8月23日

「中央図書館と地域館の望ましいあり方～図書館の全域サービスを考える～」

2015年12月16日発行

ニュースNO.59（2016年1月27日発行）にワークショップのまとめ掲載

○第30回図書館学習会&ワークショップ パート2（2016年7月3日）の報告

「次世代のための図書館網を考えよう～中央図書館と地域館の望ましいあり方～」

ニュースNO.61（2016年8月26日発行）に掲載

<基本構想に生かしたい参考資料>

○第1回図書館学習会の記録「多摩市の図書館を求めて」 講師：伊藤峻^{たかし}氏
多摩市の図書館を求める会（多摩市文庫連絡協議会）1999年8月9日
1999年10月発行

○多摩市立図書館開館30周年記念学習会

「図書館のめざすもの」※ 講師：竹内愨氏 2005年11月8日
多摩市文庫連絡協議会 2006年2月発行

○『浦安図書館にできること 図書館アイデンティティ』※ 常世田良著
勁草書房 2003年

○『図書館のめざすもの 新版』※ 竹内愨著 日本図書館協会 2014年

○「出版ニュース」2016年5月中・下旬号

【論考】図書館の指定管理はどうなっているのか—松岡 要

○「出版ニュース」2016年9月中旬号

【論考】指定管理者制度で破壊される公立図書館の基礎—東久留米市の事例を通して—
山口源治郎

○『図書館の基本を求めて』I～VII—『風』『談論風発』より※ 田井郁久雄著

2008年～2015年発行 大学教育出版

※は多摩市立図書館に所蔵されている

多摩市に中央図書館をつくる会 2016.8.2 リスト作成